

表1-2-3-2

グローバルCOEプログラム（事業期間5年）への千葉大学の申請・採択状況のまとめ（括弧書きで全国の大学の結果を比較した）

2023.3.1最終調査

年度	区分分野	申請数 (全国件数)		採択数 (全国件数)		申請した専攻等（太字は採択）	拠点リダー	採択
2007 (H19)	生命科学	1 (55)	合計 4 (281)	0 (13)	合計 0 (63)	自然科学研究科・多様性科学専攻 「分子農業による医薬用高次機能性物質生産」	木庭卓人 教授	
	化学・材料科学	1 (45)		0 (13)		自然科学研究科・物質高次科学専攻 「ナノ分子場によるサステナブル化学」	金子克美 教授	
	情報・電気 ・電子	0 (37)		0 (13)		(申請なし)		
	人文科学	1 (39)		0 (12)		人文社会科学研究科・公共研究専攻 「北東アジアにおける共生のための日本研究」	山田 賢 教授	
	学際・複合 ・新領域	1 (105)		0 (12)		社会精神保健教育研究センター 「司法精神保健の学術基盤形成拠点」	伊豫雅臣 教授	
2008 (H20)	医学系	2 (72)	合計 6 (315)	1 (14)	合計 2 (68)	医学薬学府・先端生命科学専攻 「免疫システム制御治療学の国際教育研究拠点」	中山俊憲 教授	○
	看護学	0		0		看護学研究科・看護学専攻 「文化看護学の展開による豊かな「生」の創生」	正木治恵 教授	
	数学・物理学 ・地球科学	1 (36)		1 (14)		融合科学研究科・ナノサイエンス専攻 「有機エレクトロニクス高度化スクール」	上野信雄 教授	○
	機械、建築、土木、 その他工学	1 (48)		0 (14)		工学研究科・人工システム科学専攻 「バイオマイクロ空ロボティクス・デザイン」	野波健蔵 教授	
	社会科学	1 (48)		0 (14)		人文社会科学研究科・公共研究専攻 「コミュニティ生成の社会構想学」	武井秀夫 教授	
学際・複合・ 新領域	1 (111)	0 (12)	フロンティアメディカル工学研究開発センター 「統合生体情報に基づく分子医工検診学の創成」	三宅洋一 教授				
2009 (H21)	学際・複合・ 新領域	1 (145)	合計 1 (145)	0 (9)	合計 0 (9)	人文社会科学研究科・公共研究専攻 「持続可能な地球的文明の生成的発展 —公共的幸福を求めて」	小林正弥 教授	

## 第4節 アカデミック・リンク・センターの 発足と教育・学修支援

### 第1項 アカデミック・リンクという理念とその実現

アカデミック・リンクは、知識基盤社会を生き抜く力を持つ「考える学生の創造」を目的として掲げ、これを実現するために「コンテンツと学習の近接による能動的学習の促進」を実行しようとしたもので、2012年3月の附属図書館の全面的な改修・増築によって実現した。快適な学習空間、学習のための多様な資料群（コンテンツ）、

そしてこれらの利用や学習を支える多様な人材で構成される図書館を中心にこの活動は展開されてきた。機能的には「アクティブ・ラーニング・スペース」、「コンテンツ・ラボ」、「ティーチング・ハブ」という主要3機能の実現によって新しい学習環境を提供し、その目標を達成しようとしてきたものである。

この構想の背景には、知識基盤社会—知識や情報が社会の様々な活動において重視され、意思決定等において十分に活用される社会—を生きる力を持つ人材を送り出すことが大学に求められていることがある。2008年12月に発表された中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」においては、学士力として、自らが専攻する学問分野の基本的な知識の体系的な理解とその意味の理解だけではなく、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力などの、知的活動でも職業活動や社会生活でも必要な汎用的技能をもち、さらに、社会的責任、倫理といった態度を身につけ、これらを総合的に活用して自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力を持つことが求められていた。アカデミック・リンクは、このような社会的要請に対して、千葉大学の「憲章」において示される「自由・自立の精神を堅持して、地球規模的な視点から常に社会とかかわりあいを持ち、普遍的な教養（真善美）、専門的な知識・技術・技能および高い問題解決能力をそなえた人材の育成」に内在する精神を踏まえた上で示した1つの対応策であったと言える。

### (1) 「アカデミック・リンク」構想の実現まで

本学附属図書館は、土屋俊館長の時代（第1次：1998～2001年度）に「総合メディアホール（仮称）」構想を策定した。これは、図書館資源と計算機資源を統合的に管理、提供するという考えの下に図書館の増築、改修を行なおうとするもので、1980年代にアメリカの大学で多く見られた情報関連資源の統合的管理体制の模倣であったと言える。この構想は文部省（当時）に対する概算要求資料の作成という形で具体化されたものの実現には至らなかった。およそ10年を経て、2009年度に附属図書館旧館（現在のK棟）の耐震化のための改修に向けた予算要求を行う際に、今日の「アカデミック・リンク」構想の原型といえる、「ライティング・センター」「コンテンツ・センター」「ティーチング・センター」の3つの機能を含む「総合メディアホール（仮称）」構想として再構築され、これを施設整備の目的とした。幸いにして、2010年度予算として増築を含めた耐震改修が認められ、構想の名称を「アカデミック・リンク」とすることとなった。

2010年度においては、新しい機能の実現に向けたさらなる検討を行なうために、

アカデミック・リンク検討作業部会が設置された。当初の構想以後の情報通信技術の進展を踏まえて構想が練り直され、各機能を再構成して「アクティブ・ラーニング・スペース」「コンテンツ・ラボ」「ティーチング・ハブ」と改称し、これらの機能を実現するために「アカデミック・リンクによる千葉大学の教育改革」というプロジェクト名で予算要求をすることとなった。その結果、2011年度から2014年度の運営費交付金特別経費（プロジェクト分）が



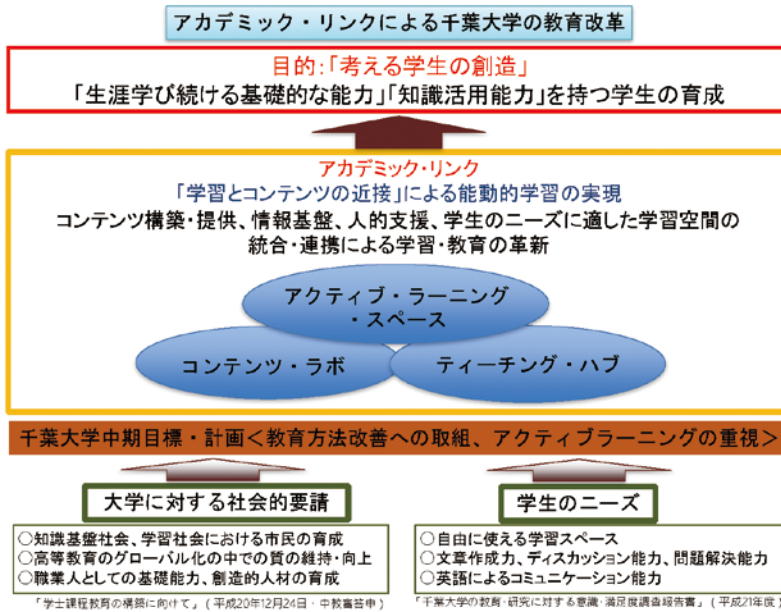
写真1-2-4-1 アカデミック・リンク・センター

認められることとなった。この措置を受けて、附属図書館、総合メディア基盤センター（当時。現在の情報戦略機構）、普遍教育センター（当時。現在の国際未来教育基幹キャビネット全学教育センター）が協力してアカデミック・リンク・センターを学内共同利用機関として4年間の時限設置とすることとした。この方針の下、アカデミック・リンク・センターは2011年4月に発足し、2010年度にアカデミック・リンク検討作業部会の主査であった竹内比呂也（文学部教授、附属図書館ライブラリーイノベーションセンター室員）がセンター長として指名された（同時に附属図書館長としても指名された）。東日本大震災の影響を受け建築工事に遅れが生じたため、アクティブ・ラーニング・スペースを含む附属図書館の全面開館は当初予定していた2011年中には実現できず、2012年3月14日に附属図書館増改築／アカデミック・リンク・センター設置記念式典を挙行し、3月16日には一般利用を開始した。

## (2) アカデミック・リンクの3機能

図1-2-4-1に示したように、アカデミック・リンクは「学習とコンテンツの近接による能動的学習の実現」のために、3つの機能を準備している。設置当初の機能は以下の通りである。

図1-2-4-1 アカデミックリンクの基本コンセプト



a. アクティブ・ラーニング・スペース

学生が、さまざまな資料、コンテンツ、情報通信技術、あるいは学習を支援する人々(教員、図書館員、学生)を最大限活用しながら、グループや個人で学習を行うのにふさわしい場、自らの学習の成果を公表する場を提供する。

b. コンテンツ・ラボ

授業の事前事後学習やさらにその主題について掘り下げて学習するために有益な図書類webサイトを案内する「授業資料ナビゲータ」を強化するとともに、「授業資料ナビゲータ」で提供される資料や授業で使う教材の電子化、授業そのものの録画などを行い、これらの学習に資するコンテンツを、ラーニング・マネージメント・システムを介して円滑に提供する。

c. ティーチング・ハブ

ラーニング・マネージメント・システム(千葉大学においてはMoodle)の運用を支援するとともに、教材の電子化や情報通信技術の教育への応用等のためのファカルティ・ディベロップメント(FD)、アクティブ・ラーニング・スペースで活動するス

チューデント・アシスタント（SA）の育成を行う。

これらの機能の具体化に向けて、教職共同の形で教育・学修支援のための多様なプロジェクトを展開した。

### (3) 空間設計の基本的考え方

アカデミック・リンクは、図書館機能を基礎とした新たな学習環境の構築をめざすもので、学生の多様な学習スタイルに応えられる学習空間を提供することを実現した。アカデミック・リンクの建物は、増改築によって、4つの建物で構成されることになった。これらは、それぞれの役割・個性を明確にしながら相互補完的に存在しており、伝統的な図書館の良さを残しつつ、多様な学習スタイルに対応する形となった。すなわち、L棟（Learning）：黙考する図書館、I棟（Investigation）：研究・発信する図書館、N棟（Networking）：対話する図書館、K棟（Knowledge）：知識が眠る図書館である。

このうち、新築部分であるN棟とI棟はアカデミック・リンク構想に沿って新築された部分で、広さはおよそ6,150平方メートルである。基本コンセプトは、この中で展開される様々な活動の「見る」(see)「見られる」(be seen)化である。「見る」「見られる」環境を実現するために、N棟においては、空間を極力細切れにしないようにするとともに、グループ学習室、研究個室のしきりは透明ガラスにしている。またプレゼンテーションスペースを設置し、学習・研究成果の発表などをできるようにした。

### (4) コンテンツ提供の基本的考え方

アカデミック・リンクでは、授業と関連するコンテンツの制作・提供が最重要課題の1つと考えられてきた。「授業資料ナビゲータ」(パスファインダー)を1つの手がかりとして、学習の幅を広げる、あるいはより深めるために必要な図書などを案内するとともに、これらなるべく利用しやすいように、多様な形態(紙の資料だけではなく、電子化できるものは電子化して)で提供することを意図した。

### (5) 人的支援の基本的考え方

図書館においては、これまで、情報リテラシースキルを涵養するためのデータベースや文献管理ソフトの使用法などの講習会については学習環境を変革する観点から強

化されてきた。アカデミック・リンクの取り組みにおいては、個別的な人的支援にリソースを傾注することとし、そのために大学における多様な人的資源（教員、職員、学生）を学習支援に活用するという考え方をとり、特に大学院生による、学部生を主たる対象とした学修支援活動を中核とした。

## 第2項 アカデミック・リンクのさらなる展開

第1期というべき2011年度からの4年間の活動について、文部科学省の高等教育政策に関する資料に教育改革の好事例として取り上げられるなど高い評価を得てきたことを踏まえ、アカデミック・リンク・センターは2015年度からは恒久的な組織となった。その下で以下のように活動の幅を広げてきた。

### (1) 教育関係共同利用拠点としての認定

アカデミック・リンク・センターは、教育関係共同利用拠点（拠点類型：大学の教職員の組織的な研修等の実施機関）として2015年7月に文部科学大臣の認定を受けた。その後2度の再認定があり、現在の認定期間は2027年度末までとなっている。

アカデミック・リンク・センターにおける教育関係共同利用拠点としての活動は、教育・学修支援専門職養成に特化したものとなっているが、それは、教育・学修支援の展開には、そのための専門的な訓練を受けた人材が不可欠という認識を2011年からの活動を踏まえて得ていたことによる。

アカデミック・リンク・センターでは、教育関係共同利用拠点としての活動を「アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成プログラム」(Academic Link Professional Staff Development Program for Educational and Learning Support : ALPSプログラム)と称し、履修証明プログラムの開発と運営、セミナー・シンポジウムの開催などを行なっている。またこのプログラムは、本学独自の取り組みである教務系専門職“SULA”の育成プログラムとして機能している。

### (2) 「考える学生の創造」から「知のプロフェッショナル育成」へ

アカデミック・リンク・センターでは、2017年度概算要求において改めて組織整備要求を行い、これが認められて3名の教員ポストが5年間措置されることになった。これを踏まえて、これまでの成果を強化・継続しつつ、支援対象を広げるという観点から大学院レベルの教育・学修支援の体制を整備し、これからの社会を支える



「知のプロフェッショナル」育成を目標として掲げた。アカデミック・リンク基盤強化の方向性として、これまでの基本概念である「コンテンツ・ラボ（コンテンツ）」「ティーチング・ハブ（人的支援）」「アクティブ・ラーニング・スペース（学習空間）」をそれぞれ「デジタル・スカラシップ開発」「学習支援高度化」「リサーチ・コモンズ推進」へと発展させた。



写真1-2-4-2 アカデミック・リンク松戸

また、アカデミック・リンクの全学展開として、附属図書館松戸分館の改築を契機に「アカデミック・リンク松戸」を2020年10月に完成させ、園芸学部・同研究科の教育に適した教育・学修支援活動を展開している。

### (3) コロナ禍への対応

2020年春に始まったCOVID-19パンデミックによりキャンパスへの入構制限がなされたことから、アカデミック・リンク・センターおよび附属図書館では、一部窓口サービスを継続しつつもオンラインでのサービス・支援の提供に全面的にシフトすることとした。具体的には、1) 電子書籍の重点整備（その後「電子書籍重点整備方針」を策定）、2) オンライン学修支援ポータルEYeL!の構築・提供、3) メディア授業のための図書館所蔵資料の電子的提供、4) 学習支援デスク等のオンライン化である。その後入構制限も解除され、キャンパスに学生が戻ってはきたが、本学が推進するスマートラーニングに対応した学修支援体制の構築という観点から、支援のハイブリッド化あるいはオンライン化をさらに進める予定である。

## 第5節 スーパーグローバル大学創成支援事業・ 大学の世界展開力強化事業

千葉大学の本格的なグローバル化は、20年ほど前から始まっている。つまり本格的には21世紀になってからとなる。したがって千葉大学の1999年（50周年）以降の